

第2章 銃後

銃後の暮らし② 置を突き抜けた二つの弾丸

佐々木 甫さんのお話から

○満州事変 昭和六年（一九三二年）から昭和八年の間の日中間の武力紛争。この時、日本の関東軍が、中国東北地方（満州）を占領し満州国を建国した。

○支那事変 日中戦争に對する、当時の日本側の呼称。

私の人生は、昭和二年（一九二七年）から始まっていますが、その間、満州事変、支那事変、太平洋戦争がありました。十四歳のころは支那事変の最中で、私は室蘭中学校の生徒でした。

私の友人で、志願して兵隊に行った人がいて、家族や同級生が室蘭の駅まで見送りに行きました。昨日まで友達であり、お兄ちゃんだった人が、人が変わったように背筋がぴりっとしていました。お母さんは目を真っ赤にしていました。子どもは志願して行くのだから、本人も何がしかの覚悟はしていたのでしようけれども、親にしてみれば、死に行くことが分かっていたのです。父親は、涙をじっとこらえていました。

我々は、泣いて別れるわけにもいかないし、生きて帰ってこいとも言えないし、死んでくれとも言えないのだけれども、自分の胸の中にある青春や友達への思いも全部含めて、「万歳。」という言葉の中にそれを表し、別れました。彼は、窓をあけて姿が見えなくなるまで手を振りました。我々も、一生懸命、彼が見えなくなるまで手を振り続けました。

一人友達が行った、明日はまた別の友達が行くということ、私どもは小さいときに何度も経験したのです。

私は、岩見沢生まれですが、小学校四年生から室蘭へ行きました。室蘭は、大変交通の便のいいところでした。また、新日鉄と日本製鋼所という戦争の兵器を作ることに関連した会社があり、アメリカはここをつぶす必要があるという作戦はもっていたと思うのです。

○非国民 当時の日本では、戦争に協力しない者や戦争に反対していると見なされた者を、国民としての義務を守らない者、国家を裏切るような行為をする者として非国民と呼び非難した。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。

○空母 航空機を搭載し、これを発着させるための飛行甲板や格納庫などを備えた軍艦。航空母艦ともいう。

○グラマン アメリカの軍用機メーカー。第二次世界大戦では、戦闘機F4F、F6Fが有名。

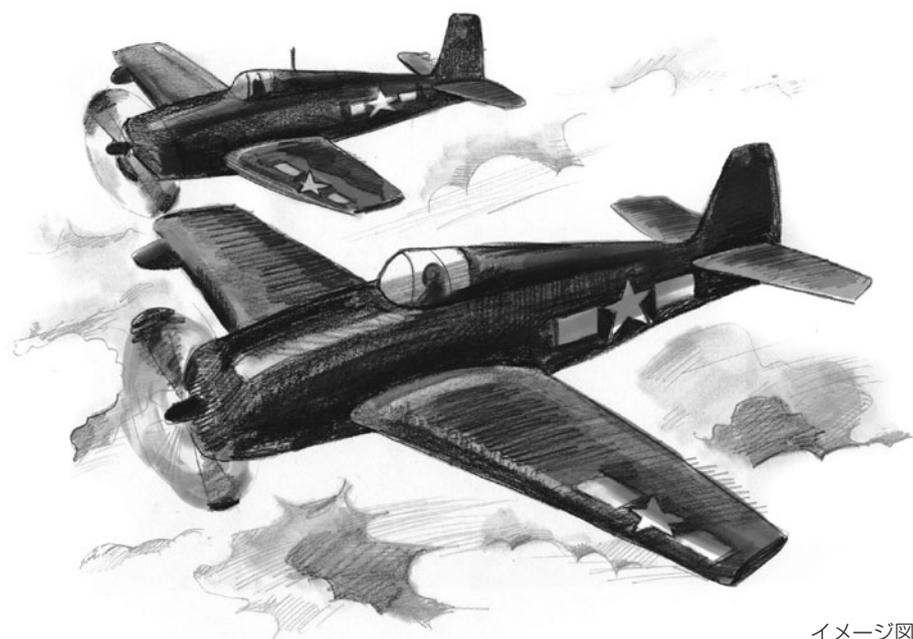
戦争で勝っているうちはいいのだけれども、負けるようになってきたときに、我々としては何か対応をしなければならぬということを考え始めました。でも、口には出しません。口に出したら非国民、おまえは日本人かと言われます。でも、心配はしていたわけです。

それで、私たちは、家族全員が入り込むことができるような防空壕をつくりました。空襲警報があったら、授業中であってもその中に駆け込むのです。

この防空壕は、スコップで穴をあけてつくりますが、穴をあけるといっても並大抵のものではないのです。崩れるかもしれないという心配があるから、必ず、木を組んで、枠をつくって、ある程度の大きさになったらそれを押し込んでというやり方です。それを隣近所で助け合いながらやるのです。お父さんは、勤めに出ていたり、兵隊に行ったりしているのですが、お母さんと子どもの仕事になりました。私の班は、十五軒あり、そのうち七軒の防空壕をつくった記憶があります。

日本の戦線が不利になり、アメリカの軍艦がだんだん日本に近づいてくるという状態になり、いよいよ室蘭が空襲を受けることになりました。

昭和二十年七月十四日土曜日の夜明け、北海道の沖合にあったアメリカ軍の空母からグラマン



イメージ図

グラマンの大軍

○高射砲 敵の航空機の攻撃から護るために作られた大砲。帝国陸軍では高射砲、帝国海軍では高角砲と呼んだ。

○B 29 第二次世界大戦末期に登場したアメリカ、ボーイング社製の大型長距離爆撃機。一万メートルの高度を飛んだ。北海道以外の日本空襲にはほとんどこの飛行機が使われ、広島・長崎への原爆投下にも使われた。

などが上空に飛んできました。私は、四十メートルぐらいのがけの上から眺めていると、飛行機の操縦士の黒い姿が見えました。それこそ地上から三十〜四十メートルぐらいまで飛行機がおりてきているので、高射砲は使えませんでした。唯一、郵便局の屋上にあった機銃だけが活躍していました。

実は、何か月も前からB 29が飛んできていました。高射砲で撃つても、飛行機は高射砲が届く上を飛んでいますので、全然役に立ちませんでした。彼らは何をしていたかというところ、写真を撮っていたのです。

日本の防備の手の内が全部知られている上に、地形まできちんと分かっている、おそらく、気候なども全部調べていたはずですよ。

この空襲のときに私はひどい目に遭っているのです。がけの上になっていたのですが、飛行機は回ってこちらに降りてきました。私は慌てて自分の家の玄関の中に入りました。家は震える、ガラスは割れるのです。耳は割れんばかりです。二機、三機と続いてやってきました。瞬間的に自分が狙われたのではないかと思いました。

空襲が終わって、お隣の家に入ったら、畳が二枚くらい押入れの前に立てか



イメージ図

2枚立てかけてある畳

畳を突き抜けた二つの弾丸

けてありました。万が一、防空壕まで行けない場合に、そこに隠れるのです。畳というのはものごく丈夫なのです。二枚立てかけてある畳に弾丸がぐにやと入っており、貫通しなかったのです。

ところが、私の家にも弾丸が入っているよと言われたので、母親と一緒に行ってみました。それは畳を突き抜けて床下に入っていたのです。私が驚いたのはその次です。

二つの弾痕をつなげる線を引いたら、私が飛び込んだ自分の家の玄関だったのです。助かったけれども、初めて怖いものだと思います。戦争だから、大変なことは分かるのですが、飛行機が飛んでいるくらいにの感覚でしたものですから、そういう二つの弾丸と穴を見た瞬間に、ざわつとしました。この恐怖が私としては今でも印象に残っています。

○女学校 小学校を卒業した後に、高等女学校に進学する女子もいた。

戦争の終わりごろには、女学校の女の子まで竹やりを持って訓練していました。向こうは鉄砲や大砲を撃ってくるのに、こちらは竹やりです。それが異常ではなかったのです。

私も、小隊長という立場で、十人くらいの友達を指揮しながら畑の中でよく戦争ごっこをやっていました。それが何も異常ではありませんでした。それくらい、戦争というものは人間をおかしくするのです。

戦争は我々一人一人の命、あるいは命だけではなくて魂までもおかしくしてしまうという、本当に悲惨な状態をつくることになるのです。

戦争がこれからはないようにしてほしいと思います。

DATA

平成21年度厚別区平和事業

聴き取り

- ・平成21年11月11日
- ・厚別区役所



佐々木 甫(ささき・はじめ)さん

- ・昭和2年(1927年)生まれ
- ・札幌市厚別区在住